ワラビスタンにおける「わかりあえる日本語」の動機付け
—在日トルコ系クルド人のインタビュー調査から—

片山奈緒美（筑波大学大学院）

要　旨

日本国内で外国人が集住するコミュニティにおいては、接触場面を増やして相互理解を深め、日本人住民と外国人住民の双方に日本語コミュニケーションの動機付けを伴う「わかりあえる日本語」（片山 2018、2019、2020）を構築することが重要だろう。本研究は「わかりあえる日本語」の概念のうち〈動機付け〉に着目し、埼玉県川口市付近に集住するトルコ系クルド人の協力者にインタビュー調査を行った。インタビューで語られた内容をコード化したのち、言語バイオグラフィー（Nekvapil 2003）の手法を援用して、協力者の日本語コミュニケーションの〈動機付け〉を分析した。

キーワード　「わかりあえる日本語」、動機付け、言語バイオグラフィー、コミュニケーション、トルコ系クルド人

1. はじめに

1.1.「わかりあえる日本語」について

急速に多様化する日本国内の多文化環境において異なる背景を持つ人々が継続的にコミュニケーションを取り、相互理解を深める日本語コミュニケーション「わかりあえる日本語」を構築することが重要である（片山 2018、2019、2020）。

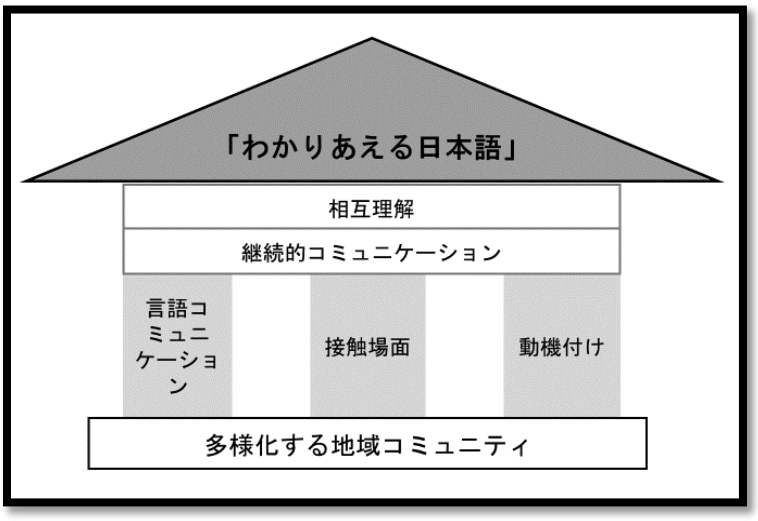


図 1 「わかりあえる日本語」のイメージ

図 1 に「わかりあえる日本語」のイメージを示した。多様化する地域コミュニティにおいて〈接触場面〉の確保、日本語や「やさしい日本語」など〈言語コミュニケーション〉手段の存在、コミュニケーションの意欲となる〈動機付け〉の維持という 3 つの要素が揃

うことで継続的なコミュニケーションが行われ、相互理解が促される。その結果、互いに相手の考えや態度をわかりあうコミュニケーション「わかりあえる日本語」が構築され、多文化共生が進むだろう。

ある地域で「わかりあえる日本語」を構築するには、その地域の構成員である日本人住民と外国人住民の双方を観察する必要がある。本稿では「わかりあえる日本語」の3要素のうち〈動機付け〉に着目し、トルコ系クルド人が集住する埼玉県のJR蕨駅周辺エリア（通称：ワラビスタン）におけるクルド人側の〈動機付け〉を明らかにしたい。

1.2.在日トルコ系クルド人について

埼玉県川口市と蕨市の市境付近にあるJR蕨駅付近（通称：ワラビスタン）には、トルコ系クルド人（以下、クルド人）が約1,200～1,500人集住するとされている。1990年代から来日が始まり、家族や親類を呼び寄せて独自のコミュニティを形成してきた。母国トルコでのクルド民族への迫害や弾圧を理由に日本で難民申請をするが、2019年12月現在、難民認定された者はいない。その結果、来日後に日本で生まれた子どもを含む多くのクルド人が在留資格を持たず、不法滞在者として入国管理局の施設に収容されるか、就労と移動を禁じられた仮放免者としての滞在を長期間続けている（中川2001、ロイター2016)。

ワラビスタンでは治安悪化や生活習慣の相違を懸念する地域の日本人住民とクルド人住民とのあいだにしばしばトラブルが発生するが（藤林2017)、トラブルを回避するためのコミュニケーションが取られていない。

しかし、片山（2020）のワラビスタンのクルド人への日本語意識調査によると、〈場所（道順）を聞く〉は87.1%、〈日本人に電話をする〉は75.6%、〈役所などの窓口で質問・交渉をする〉は50.6%が日本語で「簡単にできる」または「難しいができる」と回答している。つまり、簡単なやりとり程度の日本語力があると自己評価しているクルド人は一定割合存在する。では、ワラビスタンの住民間のトラブルを解決するには、クルド人の日本語習得以外にどんな方法があるだろうか。本稿は、クルド人女性へのインタビューから「わかりあえる日本語」の概念のうち〈動機付け〉に着目し、ワラビスタンでクルド人側のコミュニケーション意欲である〈動機付け〉について明らかにしたい。

2.外国人集住地域

外国人集住地域では外国人住民が母国の言語や文化、生活様式を維持したまま生活する独自のコミュニティが形成されやすい。そうした地域で起こる問題は地域に焦点をあてることが必要であり、「共生」を押しつけるのではなく地域の過去の取り組みを検証することが課題となる（松宮 2010)。つまり、外国人集住地域の地域性やこれまでの取り組みを把握し、その地域に集住する外国人の特徴を捉えることが重要である。

2.1岡山県総社市の場合

岡山県総社市は自動車部品工場などで製造業に従事するブラジル人住民が多く、これまで日本の生活への適応や、ブラジル人児童の教育（オチャンテ2013）など外国人集住地域

が抱える問題が指摘されてきた。また、日本国内でブラジルの文化や生活様式を維持できる「トランスナショナルな定住化」が要因となり、地域の日本人住民との接触場面は増えていない（小内 2009)。そして、多くのブラジル人は雇用形態が不安定なため、よりよい条件の仕事が見つかると転職や移動を繰り返す傾向があり、日本国内だけではなく日本ーブラジル間の行き来も多い（楠本 2007)。これらを踏まえて総社市のブラジル人住民の言語生活について調査した中東（2014）は、ブラジル人の日本語使用場面は限定的で地域の日本人住民との希薄な関係性や、日本語教室を地域住民同士の交流の場として機能させる必要性について指摘した。

これまでの先行研究から、総社市ではブラジル人の移動の多さに留意し、どのように地域社会と接触させてコミュニケーションを維持させるかが課題と言える。課題の解決には移動の多さを念頭に置いた生活や教育、日本語支援が必要になるだろう。

2.2.埼玉県川口市の場合

川口市には本稿でとりあげるクルド人集住地域と隣接するエリアに 1978 年に公団住宅として建設され、現在は UR 賃貸住宅団地となった川口芝園団地（全 2,454 戸。以下、芝園団地）がある。川口市芝園町のほぼ全域を芝園団地が占めており、約 5,000 人の人口のうち、2015 年以降は外国人住民が日本人住民を上回っている（国土交通省 2019)。

芝園団地には 1990 年代以降に中国人住人が増え（江・山下 2005)、かつてはごみや騒音などのトラブルが起こっていたが、管理者の UR 都市機構や団地自治会が住民向けのお知らせを日本語と中国語の 2 カ国語で掲示するなどの取り組みを続けた結果、表面的なトラブルは減少して日本人住民と中国人住民の「共存」はできている。ただし、互いに協力しながら生きる「共生」は実現しておらず、「静かな分断」が存在し（朝日新聞 2018)、両者のコミュニケーションが十分に行われているとはいいがたい。高齢の日本人住民と外国人住民が共存する芝園団地は、今後ますます少子高齢化が進む日本各地の地域社会に増加する外国人住民とのあいだに発生するコミュニケーション課題を解決するための先進的モデルとなるだろう。

3.調査について

ワラビスタンにおいて日本人住民とクルド人住民のコミュニケーション課題を解決するため、「わかりあえる日本語」の動機付けに着目したインタビュー調査を行った。インタビュー協力者はワラビスタンで通訳をしているクルド人の成人女性（KF1）である。インタビューはクルド人対象の日本語教室で行い、最初に初来日の時期を尋ねたほかは事前に質問内容や順番を決めず、基本的に自由に語ってもらった。

3.1 調査対象と方法

本研究のインタビュー対象者は下記の通りである。

表 1 インタビュー対象者（KF1）について

インタビュー対象者
KF1（30 代、女性、既婚） ワラビスタン在住。 家族：夫。子どもなし。 来日後に日本語を習得し、家族や友人の通訳をする。

本研究でインタビュー対象者を KF1 に絞ったのは以下の理由による。クルド人家庭は一般的に男性のみが外で働き、女性は家に残って家事育児を担うため、成人女性が家族や友人以外の人と接する機会は限られ、日本語習得も遅れている。しかし、KF1 は日本語習得が遅れている成人女性のなかでいち早く日本語を習得し、家族や友人知人のために役所や病院等での通訳を担っている。そのため、KF1 の語りから女性を中心とするワラビスタンのクルド人の日本語コミュニケーションについて間接的に観察することができるだろう。

KF1 は《初来日》《帰国後》《再来日》のほぼ 3 つの時系列に沿って語っており、語られた内容には以下のようなコードをつけた。

表 2 内容コード一覧

内容コード
［最初の来日］［日本語未習得］［帰国］［兄の逮捕・拷問］
［2 度目の来日］［アルバイト］［KF1 の日本語習得］［難民申請］
［来日クルド人の増加］［クルド人来日の理由］
［日本の査証の厳格化］［仮放免］
［日本人とのコミュニケーション］［通訳として］
［クルド人の日本語習得］［クルド人の日本語習得の態度］
［役所で］［学校で］［日本人の支援］［クルド人の死］

3.2. 理論的枠組み

本稿は前項のようにコーディングしたデータについて、言語バイオグラフィー（Nekvapil 2003）の手法を援用して KF1 の語りを分析する。

Nekvapil（2003）は、言語バイオグラフィーとは語り手がライフ・ストーリーの語りから自らの言語習得や言語使用について行う説明だとしている。つまり、語りの文脈の中で個人的、社会的、通時的な文脈が示されるため、語り手の現在の言語習得や言語使用に至った経緯を多様な角度から観察および推察することができる。

また、Nekvapil は言語バイオグラフィーを記述するインタビューの語りは「事実レベル」「主観的レベル」「テキスト・レベル」の 3 つのレベルでデータ収集が可能だとしている。

(1)事実レベル：事実、実際に起こったこと
(2)主観的なレベル：(1)に関連する語り手の意見・観察
(3)テキスト・レベル：語り手が自ら選択した話題、繰り返した話題

これらの 3 つのレベルのインタビューデータのうち、「主観的なレベル」「テキスト・レベル」の話題には語り手の主観や関心の強さが現れていると言えるだろう。

本稿は、KF1 の語りの内容コードを言語バイオグラフィーの 3 つのレベルに分類し、とくに KF1 の主観や強い関心が現れた「主観的なレベル」「テキスト・レベル」に分類された内容に注目する。この 2 つのレベルで語られた内容には、KF1 や KF1 が代弁するクルド人社会の関心事が含まれているため、ワラビスタンにおける「わかりあえる日本語」構築のための〈動機付け〉を明らかにできる。

4. 調査結果

インタビューの所要時間は 59 分間で、IC レコーダーに録音したものを文字化した。インタビュアー（本稿著者）とインタビュイー（KF1）の発話について、句点で区切られる一文ごとにテキスト番号（#1～#225）をつけた。KF1 の語りの内容に 3.1 で示したコードをつけたのち、言語バイオグラフィーの 3 つのレベルに分類したところ、「事実レベル」は 35 テキスト、「主観的なレベル」は 92 テキスト、「テキスト・レベル」は 32 テキストとなった。このうち、15 テキストが「事実レベル」と「テキスト・レベル」の両方にあてはまった。

4.1. KF1 の語りの断片①：［最初の来日］から［2 度目の来日］と［難民申請］

「事実レベル」には、KF1 が主に自身の体験や一般的に知られている事実を語ったテキストが分類された。下線部分はインタビュアーの質問を示す。

#8 まず、KF1 さんは、いつ日本に来ましたか？
#9 はじめ、観光で、2003 年、日本に来ました。［最初の来日］
#10 高校で、それから、家族と、日本に来ました。［最初の来日］

このあと、当時は日本語の習得が進んでいなかったので日本になじめなかったという主観的な観察を挟み、

#14 だから、2 カ月くらいで、トルコに帰った。［帰国］
#15 2 回目、2005 年、家族とまた来た。［2 度目の来日］

と、2003 年の初来日後、2005 年に再来日したことについて、再び「事実レベル」の語りを続けている。その直後に「#18 でも、それまで、いろいろあった」と実兄の逮捕について、自ら話題を選択した「テキスト・レベル」の語りを始める。

#20 でも、兄が、日本にいた兄が、写真が、ある写真がバッグの中に入っていて、ト

ルコの空港で捕まったのね。[兄の逮捕・拷問]
#21 （インタビュアーに）ネブロズ、ネブロズ知ってますね？
#22 ネブロズ、クルドのお祭りの写真で、バッグに入っていて、捕まった。[兄の逮捕・拷問]
#23 それだけで？
#24 そう、それだけで。
#25 ネブロズで、テロのプロパガンダってあれにして、捕まって、お兄さん、4カ月半くらい刑務所に入ったのね。[兄の逮捕・拷問]
#26 お兄さん？ KF1 さんのお兄さん？
#27 そう、お兄さん。
#28 それで、政治問題で、2003 年から 2005 年のあいだに、こういう問題起きたので、それで、家族で全員で来て、難民申請をしました。[難民申請]

さらに#32 で実兄が刑務所で拷問を受けたことにも触れている。

初来日の時期を尋ねた質問をきっかけに、トルコに帰国した翌年の 2004 年に実兄の逮捕・拷問があり、2005 年に家族が分散して来日し、難民申請をした件まで、自らの意志で再来日に至った事情を述べたと考えられる。ここでは日本人とのコミュニケーションについて直接の言及はない。しかし、実兄の逮捕と一家での来日と難民申請は、KF1 の現在に至る生活と日本語習得に影響を与えたことが推察される。

4.2.KF1 の語りの断片②：［アルバイト］と［KF1 の日本語習得状況］

KF1 は再来日後に約 5 年間していた工場でのアルバイトで日本語を習得したと「事実レベル」の語りをする。

#36 わたし、日本、来たときは…あの、工場でアルバイトして、まとめて5年ぐらいお仕事してて、で、そのあ…ときは、みんなで、アルバイトした友だちとか話す、ふだんの生活のこととか話したり、ま、そこのおばさんとかは、やさしい日本語で声かけたりして、それで…［アルバイト］

当時の工場での会話の内容は、日常生活にかかわる話題であったことにも触れている。

#39 今日、マルエツ、これ安いとか、今日カレーつくるとか、今日洗濯しましたとか、そういう感じで毎日普段のこと…［アルバイト］

この語りのあと、自身の不妊治療で忙しく、漢字を覚える時間がないことや、病院の問診票を読めるようになりたいなど、［KF1 の日本語習得状況］について主観や個人的希望を自ら語る。この部分は「主観的なレベル」と「テキスト・レベル」の語りが重複する。

#42 はい、教科書っていうのはここ（日本語教室）くらいで、ここもたまに漢字覚え

たりしてるけど、なかなかタイミング合わなくて、わたし、不妊治療とかして、また、まわりで収容所に入ってることとかもたいへんだし、漢字が覚える時間が、うまく暇な、覚える時間が見つからない。
#43 ほんとうは、自分のあの、病院の、なんていう、どこが痛いですか、いつからですか、それが読みたい。
#44 それが読めないのは、ちょっとわたし、足りないなって思う。
#45 ま、でも、覚えたいけど、ま、いまはちょっと難しい。

4.3.KF1 の語りの断片③：［来日クルド人の増加］と［クルド人来日の理由］

工場でのアルバイトをしていた 5 年間で日本語を習得したことを語ったのち、KF1 は来日するクルド人が増加したと自ら述べ、［来日クルド人の増加］について「テキスト・レベル」の語りを始める。

#52 すごい難民が増えたのは、たぶん 2014 年、15 年かな？
#53 すごい多かったのは。
#54 難民っていうのは、クルドの難民？
#55 クルドの難民。
#56 その人たちが 2014 年から 2015 年に増えた。
#57 そう、けっこう。
#58 昔、わたしが働いた時期はぜんぜんいなくて、そのときはもう 500 とかくらいで、いまはもう 2,000 近くで。

この「テキスト・レベル」の語りで来日するクルド人を「難民」と呼び、インタビューを行った 2019 年現在、KF1 がアルバイトしていた 2005～2010 年ごろと比較すると「難民」の数が 4 倍近いと述べている。増えた理由について質問すると、［クルド人来日の理由］について KF1 なりの意見を「主観的なレベル」の語りで述べた。

#62 いまは、国で、わたしたちは生まれたときから、いろんな町に住んでるクルド人は、いろいろ差別が、それが、なんていう、自由が足りない。
#63 いろんな民族とか、いろんな宗教入ってる。
#64 みんな、自由はたいへん。
#65 そういう問題、原因、それも、が、ひとつ。
#66 あと、お仕事、なかなかなくて、あるジャーナリストとか先生とか、国が辞めさせるのもあるのね。

「自由が足りない」「自由はたいへん」と「自由」という言葉を繰り返し、トルコでの閉塞感について言及している。

4.4.KF1 の語りの断片④：［仮放免］

KF1 はオーバースティのため在留資格を持たない［仮放免］者の移動と就労が禁じられた生活の厳しさについて「主観的なレベル」の語りをする。

> #93 あの、働くのができないし、保険もないし、あの…あの、埼玉から出ちゃいけないとか、もちろん、仮放免のほうがいちばんたいへん。

さらに、健康保険に加入できず、働けないことで困っていることを繰り返す「テキスト・レベル」の語りを行う。

> #98 まあ、保険、保険がいちばん困る。
> #99 保険と働けないのが。

4.5.KF1 の語りの断片⑤：［通訳として］

現在 30 代の KF1 は、来日してから日本語を習得したクルド人成人女性のなかではもっとも習得が進んでいる。クルド人コミュニティの通訳として頼られる存在であり、通院などに付き添うことがあるという。そうした役割はしばしば KF1 にとって負担が重いことを自ら「テキスト・レベル」で語る。

> #129 で、昔、3、4 年前、わたし、出産の人、よく行っていて、それでちょっと元気がなくなって、どうしてもわたしも不妊治療してるから、欲しいこと毎日見る。

自分自身に子どもがなく不妊治療している身でありながら、妊婦の通院時の通訳を依頼され、精神的な落ち込みを感じていたと説明している。また、癌など重病の人の通訳をするときの自分の精神的負担と同時にクルド人のために役に立てた喜びについても「主観的なレベル」で語った。

> #146 あー、わたしも若いので、あー、なんていう、もちろん疲れるし、それも体には、良くない、ネガティブがはいっちゃう。
> #147 それでわたしが行かないと、そういうのもやな気持ちなので、まあ、行って、わたしも若いので疲れるし、まあ、行って、疲れるけど、行ったら良かったと思う。

4.6.KF1 の語りの断片⑥：［日本人とのコミュニケーション］

クルド人女性たちが日本人住民と接触する場のひとつが学校である。地域の公立小中学校は在留資格がない子どもたちも受け入れているため、クルド人保護者が参観日等の行事で学校に行くことがある。しかし、クルド人保護者と日本人保護者のあいだに交流はない。

> #188 声かけないの、学校の中の人が。
> #189 どうしても日本語わかんないから、いいや、みたいな人が多い。

#190 先生も？

#191 あー、先生は、まあ、先生に、話が、1年に1回行くじゃないですか。

#192 そのときわたしがついて行ったりとか、お姉さんは話せるけど、うまくない、で、でも、ほかの友だち、子どものお母さんは、あまり声かけない。

#193 で、先生は声かけるけど、あまり長くは話はない。

クルド人の成人女性のなかにもKF1の姉のように流暢ではないが日本語を話せる人もいる（#192）が、日本人保護者の側がクルド人保護者には話しかけないのだという。その原因がクルド人保護者の日本語レベルが日本人保護者に伝わっていないことであるなら、クルド人保護者にも簡単な日本語なら理解する人がいることがわかれば、両者のあいだに交流が生まれるきっかけになるのではないだろうか。

5.考察

インタビューを行った2019年1月現在、KF1は家族や友人のために病院や学校行事に付き添い、通訳を引き受けるほど日本語を習得している。KF1は高校生だった2003年の初来日時は日本語がわからず、日本になじめずに2カ月でトルコに帰国した。しかし、2005年の再来日後、5年間の工場でのアルバイト中に日本人スタッフと毎日会話しているうちに日本語を習得したと語った。こうしたKF1自身の体験を述べた「事実レベル」の語りにはアルバイト先で日本語を習得したという表面的な情報しか現れない。

しかし、KF1の意見や観察を述べた「主観的なレベル」の語りや、KF1が自ら選択した話題や繰り返した話題を示す「テキスト・レベル」の語りからは、KF1自身の考えや、通訳を通じて観察したクルド人の日本での生活に関する考えや態度を見ることができる。また、同一の内容コードについて自分の意見や観察（主観的なレベル）を自ら述べたり、繰り返し述べたり（テキスト・レベル）した場合には語りのレベルが重複することがあり、該当する内容コードについてKF1が意欲的に語ったことが表れている。

KF1のすべての語りのうち、「主観的なレベル」か「テキスト・レベル」、またはその両方に分類された内容コードを《初来日》《帰国後》《再来日》の時系列別に整理すると下の表のようになる。

表 3 KF1 の語りの「主観的なレベル」と「テキスト・レベル」のコード

主観的なレベル	テキスト・レベル
《初来日》［日本語未習得］	《初来日》
《帰国後》	《帰国後》［兄の逮捕・拷問］［難民申請］
《再来日》［KF1 の日本語習得］	《再来日》［KF1 の日本語習得］
［来日クルド人の増加］［クルド人来日の理由］	［来日クルド人の増加］
［日本の査証の厳格化］　［仮放免］	［日本の査証の厳格化］　［仮放免］
［クルド人の日本語習得］	［クルド人の日本語習得］
［日本人とのコミュニケーション］	［日本人とのコミュニケーション］
［通訳として］［クルド人の日本語習得の態度］	［通訳として］
［役所で］［学校で］　［クルド人の死］	［学校で］　［クルド人の死］

「主観的なレベル」と「テキスト・レベル」の両方に分類された内容コードには＿＿＿＿をひいた。これらは KF1 自身および KF1 の通訳の目で見たクルド人住民の意識や態度を KF1 が意欲的に語った部分と言える。ここで語られた意識や態度を観察することで、ワラビスタンで「わかりあえる日本語」を構築するためのクルド人側の〈動機付け〉を捉えることができる。

［KF1 の日本語習得］では KF1 自身が病院で触れる日本語を覚えたいと語り、［クルド人の日本語習得]ではクルド人に必要なのは病院と買いもので使う日本語だと述べている。病院や買いもので使う日本語を中心にした日本語支援を行うとクルド人側の参加が期待でき、彼らが日本人とコミュニケーションを取る動機付けになるだろう。

そして、［来日クルド人の増加］や［日本の査証の厳格化］、［仮放免］といったクルド人が抱える特殊な事情や困窮する生活についても 2 つの語りのレベルで言及しており、来日の背景や来日後の安全ではあるが苦しい生活について伝えようとする意欲が現れている。この意欲は、たとえば日本語が話せるクルド人が小中学校の授業などに参加して、クルド人について語る機会を設けるなどすると、クルド人が日本人住民と交流する動機付けに転換することができるのではないだろうか。

［学校で］コードでは、日本人保護者がクルド人保護者は日本語ができないと思いこんでおり、無視されるという訴えが語られた。クルド人保護者のなかに平易な日本語なら話せる人がいることを日本人保護者に知らせることにより、日本人側がクルド人側に平易な日本語で話しかける可能性が出てくる。その結果、クルド人保護者側は自分ができる範囲の日本語で答えたり、日本語を習得している子どもを通じて日本人保護者とコミュニケーションをとる動機付けにもなるだろう。

6. まとめ

総社市のブラジル人住民や川口市の芝園団地の例からもわかるように、異なる背景を持つ外国人住民が集住する地域で日本人住民との共生を実現させるのは容易ではない。しかし、ワラビスタンのように狭いエリアに特定の民族が集住している場合、その人々が来日して集住するにいたった背景や、彼らが日々の生活で困っていることなどについては把握

しやすい。集住する外国人を対象にアンケートなどの量的研究で生活実態や言語使用などについて傾向を調査すると同時に、集住地域のひとりひとりの外国人にインタビューをして、量的研究では表に現れにくい実態を捉える必要がある。

本研究ではワラビスタンのクルド人コミュニティで通訳をしている成人女性にインタビューすることで、日本語未習得で来日し、通訳ができるほど日本語を習得した背景や通訳としての悩み、通訳だからわかるクルド人コミュニティの一面を聞きとることができた。その結果、多文化共生社会を形成するために構築すべき「わかりあえる日本語」の 3 要素のうち、クルド人側の〈動機付け〉を示すことができた。査証を持たない仮放免者として就労を禁じられていることと健康保険を持っていないことなどによる困窮や、トルコでの迫害や弾圧などについては、日本人住民に伝える場を設けることでクルド人自身が自ら語ることができるだろう。それによって日本人側がクルド人について新たに知識を得たり、理解を深める機会になる。

ワラビスタンのクルド人のように難民申請が認可されないまま 1,500 人もの外国人住民が集住している地域は日本国内でほかに例がない。彼らが抱える問題はきわめて特殊なケースだとも言えるが、一方で大量の外国人材が日本国内に流入する時代を迎え、同国人がいる地域に集住する人々が増えることも考えられる。その意味では、ワラビスタンのクルド人の生活及び言語習得実態や地域の日本人コミュニティとのコミュニケーションについて調査することは意義がある。ワラビスタンは今後、日本国内で起こりうる問題が凝縮されたフィールドだと言えるだろう。

参考文献

朝日新聞（2018）「芝園団地に住んでいます　記者が住民として見た、『静かな分断』と共生」2018 年 6 月 1 日、https://globe.asahi.com/article/11578981

オチャンテ・カルロス（2013）「岡山県におけるニューカマーの子どもの教育実態―総社市の調査を元に―」『環太平洋大学研究紀要』7、205-211、環太平洋大学

小内透（2009）『講座トランスナショナルな移動と定住』御茶の水書房

片山奈緒美（2018）「『やさしい日本語』から『わかりあえる日本語』へ：クルド人住民の接触場面形成の可能性と日本語教育が果たす役割」『多言語社会と言語問題シンポジウム 2018 予稿集』35-36、言語管理研究会
https://lmtjapan.files.wordpress.com/2018/12/proceedings1.pdf
（2019 年 1 月 5 日閲覧）

――――（2019）「難民申請者の言語環境に関する研究―在日クルド人の言語バイオグラフィーからの記述の試み―」『日本言語政策学会　第 21 回研究大会　予稿集』19-21、日本言語政策学会

――――（2020）「『わかりあえる日本語』構築のために―クルド人コミュニティでの日本語意識調査から―」『国際日本研究』12 号、筑波大学人文社会科学研究科国際日本研究専攻（印刷中）

楠本孝（2007）「自治体の外国人統合政策 ： 外国人集住都市会議の活動状況とその評価」『三重法経』129、27-74、三重短期大学法経学会

江衛・山下清海（2005）「公共住宅団地における華人ニューカマーズの集住化：埼玉県川口芝園団地の事例」『人文地理学研究』29、33-58、筑波大学大学院生命環境科学研究科地球環境科学専攻
国土交通省（2019）「UR 賃貸住宅団地における外国人居住者との共生の取組について」2019 年 4 月版、https://www.chintai.or.jp/pdf/20190416UR.pdf（2019 年 12 月 28 日閲覧）
中川喜与志（2001）『クルド人とクルディスタン―拒絶される民族―』南方新社
中東靖恵（2014）「岡山県総社市に暮らすブラジル人住民の言語生活―外国人住民の日本語学習支援を考える―」『社会言語科学』17(1)、36-48、社会言語科学会
藤林大貴（2017）「拡大する在日クルド人コミュニティと地方行政の現実」『アジ研ワールド・トレンド』266、20-20、日本貿易振興機構アジア経済研究所
http://www.moj.go.jp/content/001289225.pdf （2019 年 9 月 1 日閲覧）
松宮朝（2010）「ニューカマー外国籍住民集住地域の比較研究に向けて――地域からとらえる視点の可能性」『愛知県立大学教育福祉学部論集』(59)、19-26、愛知県立大学
ロイター（2016）「特別リポート：明日見えぬ難民申請者,広がる不法就労の闇市場」、2016 年 8 月 9 日
https://jp.reuters.com/article/special-report-jp-refugee-idJPKCN10J2JY
（2019 年 1 月 5 日閲覧）
Nekvapil, J. (2003) Language biographies and the analysis of language situations: on the life of the German community in the Czech Republic. *International Journal of the Sociology of Language, 162,* 63-83.

（片山奈緒美、筑波大学大学院博士後期課程、naomikatayama@hotmail.com）